
貴方は私を支配する

門倉 いさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方は私を支配する

【Nコード】

N1978Q

【作者名】

門倉 いさみ

【あらすじ】

国王・グレンダートにアリアが正妃として嫁いだのは16歳の時。唯一の庇護者である父・セイータ公爵とアリアは共に、国王派にただ疎まれ続けていた。そして子がないまま時は過ぎ、国王には寵愛する少女が現れ、全てが急変していく。窓辺に立ち、そこから臨むほんの少しの一方的な時間だけが孤独なアリアの幸せだった。ただ、それだけで良かったのだ。

視点が変わります。視点によって時系列にはらつきがあります。また、幸せな結末ではありません。同性愛表現があります。

追記・完結後、矛盾点などの修正加筆予定です。

1 正妃・アリア

窓辺に立ち、じっとガラス越しの向こうを見た。

けれど、夜の帳が下りたそこはよく見えなくて物悲しくなる。

陽の下でなら、感嘆の溜め息を誘う薔薇が庭園中に咲き誇っているのに。

そう思う事は、未練だろうか。

「……私は、ここを眺めるのが好きだったわ」

背後に立つ気配へ、秘密を告白するかのような囁き声で告げた。

夜の色が支配している今、静けさを払拭するような楽しげな音楽と歓喜のざわめきが風に乗って届いて来る。

すぐ近くではないから、うつすらとした膜越しのように聞こえる大勢の気配は決して自分を歓迎はしない。

瞼を伏せる事もせず、ただガラスの向こうを見下ろし続ける。

そんな彼女に一步、背後の気配が近付いた。

慰めようというのか。

けれど、言葉も温もりも伸びて来ず、一步で止まった気配はだがそれこそが優しさなのだとすでに知っていた。

「ねえ、私は決めたわ」

どれだけ微動だにせず、時間が過ぎたか。
未練を振り切るように振り返った。

室内には灯りひとつなく、薄闇の中では相手の姿を見れない。

だが、ここ数年で馴染んだ気配はあまりにも心地良いから、目の奥が痛い熱を持つ。

それでも涙は流れず、表情の乏しい目尻を少しだけ痙攣させた。

「ここから臨める薔薇園を、時折散歩するあの方を見ているのが好きだった」

「……………」

「あの方が、決してこちらを振り向く事がなくても。私に気付かなくても。それでも一目あの方を見れるだけで幸せだった」

「……………」

「……………けれど、駄目ね。今はそれが辛い。私ではない人と隣り合って優しく笑うあの方を見るのが、幸せだけとは思えなくなってしまう」

それが罪のようにして視線が眇められる。

その視線の先で見ているのは、辛い光景なのだろう。

僅かに震えた声音に気付けるのは、今彼女と向かいあっている者だけ。

表情の乏しい彼女は、《人形姫》と呼ばれていた。

唯々諾々と、ただ周囲に言われるまま流されるまま生きているかのような、そうして作った笑顔を浮かべ、紡ぐ声音の淡々さが、彼女を《人形》と言わせていた。

だが、そうではないと。

気付いているのは、やはり今向かい合っている者だけ。

彼女はすつと右掌を下に向けて上げた。

差し出された華奢な手に、伸ばされた大きな掌がそれをそつと取り、やわりと握る。

「連れて行って。終わりの場所に」

「お前の望む通りに」

すぐさま返った声音の強さに含まれた柔らかさに、彼女は淋しげに小さく笑った。

アリア＝ヴァイス＝クロス＝セイータは、三代以上続くことで血統貴族と総称される百二十三家の貴族たちの頂点にある筆頭公爵家の娘だった。

家系図を紐解かずとも建国以来続いている由緒ある家柄で、王家とも密接に繋がっているのは周知の事実だ。

セイータ家から王家に妃を何人も送り出し、また王女や王子が降り公爵家と婚姻した事も一度や二度ではない。

最も王家に近しく濃い血筋の公爵家は、だが現在最も王家…それも筆頭である国王に疎まれている。

それに至るには、現国王・グレンダートⅡヴァイスⅡシャゼⅡダリウゼンとアルフォンソⅡクランⅡセイイータ公爵との長きに渡る確執があった。

アルフォンソⅡクランⅡセイイータ公爵といえば、特に先代国王・ギルリアード二世に早くから信頼・寵愛された家臣だ。

また何を置いてもセイイータ公爵に真っ先に相談を持ち掛け、公爵の意見を重視する傾向が強かったギルリアード二世は体が弱く、公爵と同じ年であった為もあるのか、嫡子たる王子が僅か七歳の折、風邪を拗らせ呆気なく早世する間に公爵を王子の後見人に指名した程だ。

それだけであるならまだしも、公爵の生まれたばかりである娘・アリアをいずれば王子の正妃にするよう遺言した。

その事が、常日頃から気に入らなかった有力貴族たちの反感を倍増し、かつ七歳という幼さで国王とならざるえなかったグレンダート王子に元からセイイータ公爵の悪い噂をある事ない事を吹き込んでいた口の滑りを更に良くしていった。

幾らセイイータ公爵の手の者が眼を光らせようと、髪の毛一筋の隙間を見つけてはグレンダートの心にセイイータ公爵への悪印象を植えつけていくのだ。

また、国王となったグレンダートが「こつであれ・ああであれ」と口うるさくする公爵を疎ましいと思うのも早かった。

それでも、国内外のセイイータ公爵が齎す権力・影響力は大きく、国王と言えど簡単に無視出来ないもので、だからこそアリアは十六歳の成人を迎えると同時に当時二十三歳となっていたグレンダートの正妃として嫁いだ。

それから五年。

アリアとグレンダートとの間に、子はなかった。

本来、国王の正妃が子を成せなかった場合、三年で有無を言わず離縁されるのが慣わしだ。

十数代前、妾妃の生んだ王子と、それより半月遅れて生まれた正妃の王子との間で国内中を巻き込んだ玉座争いが起こり、更には正妃の第二子であるもう一人の王子が玉座争いに参戦した際の悲劇を教訓に、玉座を継ぐ者は正妃腹の子のみで、また第一子であれば男女問わず第一位王位後継者と定められた。

事実、その事で三度女王が即位している。

グレンダートの後宮には、三十人程の愛妾が存在するが、その愛妾たちにも子はなく、また子があつたとしても王位継承権は巡って来ない。

継承権の条件のもう一つが、正妃の地位にある最中さなかで産み落とす事も絶対であるからだ。

その為、後に正妃になろうと正妃になる前に生んだ子に継承権はなく王族とも呼ばれない。

余程、突出した才能でもなければ一代限りの伯爵位と生涯生活に

困らない程度の金銭が支給されるだけだ。

三年で離縁されず、アリアが五年も正妃にあったのは、ひとえに先代国王の遺言と父であるセイイータ公爵の影響力があつたからだ。だが、その影響力は急激に衰えていた。

半年前、グレンダートが一人の少女を人目も憚らず寵愛し始め、後宮の美姫たちに手を出す事が一切なくなってしまったからである。

また、その少女を寵愛しているのは国王であるグレンダートだけではなかった。

文官・武官。

それぞれの上層部に属する者たちの、それもグレンダートに近く、セイイータ公爵を敵視する有力者たちもが少女を溺愛しているのは周知の事実。

元から、正妃とは名ばかりのお飾り妃と言われ、王宮に出入りする侍女や下働きの者たちにすら軽視されていたアリアなど誰も見向きもしない。

まして、アリアの唯一の庇護者であるセイイータ公爵は僅か五日前に急死した。

表向きは、日頃から弱っていた心の臓の発作が原因と発表されたが、葬儀に参列出来なかったアリアの下を訪れた次期公爵であり、異母兄のルフォードは力弱く笑み血統貴族の筆頭から外される事をアリアに告げた。

正妃でありながら、アリアが子を成せない事を理由にした国王・

グレンダートの厳命だと言う。

命令がなかったとしても、急逝したセイータ公爵・アルソオン唯一の後継者であるルフォードには、セイータ公爵家当主として魑魅魍魎が跋扈し、陰湿な謀略渦巻く王宮を渡り歩くだけの才覚はない。

血統貴族の筆頭として相応しくないと判断されても仕方ない事だ。

事実、それを憂いたセイータ公爵・アルソオンは自身に何かあった場合を想定して、正妃である娘・アリアの後見人として血統貴族第二位のメリレンチエ公爵当主を指名し、セイータ公爵分家から優秀な者を数人、ルフォードの側近としていた。

けれど、メリレンチエ公爵の次期後継者は国王に愛された少女の後見人になる事を自ら名乗り出ており、その父である現メリレンチエ公爵も正妃・アリアが子を成していない事を国家の憂慮として後見人を降りる事をセイータ公爵・アルソオン急死の報翌日に国王に告げた。

ルフォードの側近の中にも、国王どころか他の有力貴族に排斥されようとしているセイータ公爵家に見切りをつけている者がいるという。

急逝したアルソオンの才覚が別格だったせいもあるだろう。

疎まれ妬まれ様とも、尚他者を何処か惹きつけていたアルソオンがいなくなれば、ただセイータ公爵として生き残る事に心血を注ぐしかない。

力になれない事を謝罪する異母兄・ルフォードに「気にしないで下さい」とアリアは首を振るだけだった。

グレンダートとの間に子がいれば今後もセイイータ公爵家は安泰だっただろう。

けれど、時の流れは常に変化している。

誰かの望むまま、それとも望まないままかなどとは決して関係なく。

そうして、つい二日前。

国王・グレンダートの口から寵愛している少女が懐妊している事が王宮の全ての人間に告げられた。

その時の衝撃をアリアは、だが静かに受け止めていた。

自分とグレンダートの関係。

そして、グレンダートの少女への寵愛ぶりを思えば、遠からずやっつて来た現実だったのだ。

遠く聞こえる喜びで嬉しげな数多の気配は、王宮内で今宵開かれた少女の懐妊を祝う宴である。

そこに正妃・アリアは呼ばれない。

誰も歓迎しない。

正妃ではない者の懐妊が、これ程多くの人間に歓迎されるなど本来ならありえなかっただろう。

そして、正妃の地位にあった上で子は生まれなくてはならない。

その決まり事に従い、子のないアリアは正妃の座から明日にでも

廃される事を告げられるだろう。

父であったセイイータ公爵の喪に服す期間だからと、正妃のまま
でいる猶予はもう終わる。

胸にあるのは、急逝した父の死の悼みと、父・アルフォンソと親
子として過ごした記憶。

齡六つ歳に母が病死した辺りに、それ以前の記憶がアリアにはな
かった。

薄ぼんやり霞掛かり、それ以前を思い出す事は出来なかったが、
それも今でははっきりとしている。

何故、はっきりとした記憶を持っていなかったかも。

父は常以上の厳しい顔つきで、じっとアリアを無言で見詰めてい
る事があった。

そうして、時折「アルティナン」とアリアを抱き締めて耳元で呟
くのだ。

「アリアよ。間違えないで、お父様」

名をきちんと呼んで貰えない事が悲しく、アルフォンソに縋るよ
うに何度も言った。

その度に、アルフォンソは無言を貫き、厳しい顔つきを変える事
はなかった。

（ああ、お父様）

アリアは、手を引かれて歩きながら父・アルフォンソを懐^{おも}つ。

失っていた記憶の中、母・チェリエナと微笑み合っている父を、異母兄・ルフォードとこっそり覗き見て、そのルフォードと笑い合っている自分。

母を失って以降、感情を上手く面に出せなくなっていた自分を厳しく見据えていた父が、どれ程自分を愛してくれていたか。

全て思い出してしまうえば、それは簡単に知れて。

長く続く廊下に人気は少ない。

多くが、今夜の祝宴に駆り出されている。

仮にも未だ正妃のアリアの部屋周りには警備の影さえなく、いつそ何者に襲われてしまっても構わないという国王たちの思考が明け透けに見えていた。

チクリと痛む胸の奥を知りたくなくて、自分を連れて歩く相手の手をもつと強く握った。

ざわめきが少しずつ大きくなっていく。

この先に、終わりが待っていると解っている。

知っていてそれでも、この歩みをアリアは止めるなど出来ない。

(グレンダート様……)

心の奥で呼び掛ける。

ただの一度として、決してアリアを見てはくれなかった夫。

それでも、その姿を一目見る事が出来た日は、ただ幸せな気持ちでいられた。

大きな扉が見えた。

その向こうに煌びやかな祝宴の光景が広がっている。

息を小さく飲んだ。

扉の両脇に控える王宮警備の騎士たちが、近付いて来たアリアたちの姿に気付いて眉ねを寄せる。

呼ばれていない正妃・アリアに問う言葉を、けれど騎士たちは発する事は出来なかった。

瞬時に肉体は硬直し、脇を通り過ぎようとしているアリアをただ石像のようにして突っ立って見送るばかり。

アリアの手を引く相手の空いた片方の手が、重厚な扉に軽く触れる。

本来、数人掛かりで開閉される扉は難なく開いて、光の渦でアリアの眼を射す。

「正妃・アリア〓ヴァイス〓クロス〓セイイータ。さあ、お前の最後の舞台だ」

そうだろう、アルティナン。

囁くように告げる相手に、アリアはしっかりと頷いた。表情の乏しいその顔に、けれど確かに決意を漲らせて。

2 国王・グレンダート

”これ”が己の妻となり、妃となり、次代の王の母・国母となるのだと。

初めて紹介された時の事を正直、グレンダートは殆ど覚えてはいなかった。

十二歳で王族男子として成人扱いされる年、セイイータ公爵に連れられて目の前に現れた子供は、5歳という幼さしかグレンダートに印象を残さなかった。

まして、父王を影で操っていたと言われるセイイータ公爵おとこの娘だ。まともに眼を向ける事もなく、当たり前障りのない紹介と挨拶だけを交わした初顔合わせから十一年。

婚姻を挙げる儀式の只中で二度目の顔合わせをした。

その時、初めてグレンダートはまともにセイイータ公爵の長女・アリアの顔形を見た。

そして、思ったのは（色のない女だ）という事。

感情的にも、女という性別的にも、様々な意味合いで『色』を持たない娘だと思ったのだ。

尊程度には耳には入っていた。

感情のない、仮面のような面をした《人形姫》

他者が操るには過分にも適した感の強い、生きた人形。

己には疎ましいばかりのセイイータ公爵にとって、そのような娘は都合が良かった事だろう。

唯々諾々と、父親に言われるまま生きている様さまが思い浮かび、グレンダートは婚姻の最中にも関わらず、嫌悪感に塗れた吐き気を覚えたものだ。

焦げ茶色の髪に焦げ茶色の目。

目を引くような際立った美しさのない、何処か凡庸とした空気を纏っている女だった。

見目の美しい者たちを、齡十三から後宮に召し抱えているグレンダートにしてみれば、アリアと名乗る花嫁は到底食指の動くような女ではなかった。

まして、セイイータ公爵の娘だと思えば尚の事。

《この》女に一筋の情さえ与えてはならないのだと、グレンダートは思った。

己の父であり、先代の王だったギルリアード二世の体の弱さを理由にして、精力的に王宮内を牛耳り操っていたとされるセイイータ公爵。

王太子時代、聡明とも言われていたはずの父が、何故セイイータ公爵ばかりを頼り、誰よりも真つ先に意見を訊き、そうして聞き入っていたのか。

僅か七歳で王となったグレンダートには今だに理解出来ず、何故父王は、己の後見人として、そして己の正妃となる娘をセイイータ公爵の長女・アリアと指名し遺言としたのか。

セイイータ公爵が血統貴族たちの筆頭だという権力の強さを理解は出来ても、後見人や正妃の父という立場を明確にする事が、集中的にセイイータ公爵の持つ権力を強固にし、王宮内外の安定していたバランスを崩すのは良い事ではないはずなのだ。

過去の正妃たちの出自や後見人が齎す権力や利害を紐解けば、セイイータ公爵に娘がいたからと言って正妃に据えるには後数代あとは間を置いてこそ、国内外の政治的なバランスは強固に安定する。

権力が一点に集中するのは、国が荒れる原因に容易になりやすい。

そのせいもあって、グレンダートは正妃であるアリアに『情』というものを与えようとはしなかった。

国王と正妃の不仲は、王宮内外に飛び火する。

セイイータ公爵が持った権力などを削ぐには、皮肉にもこの政略的な婚姻は有効だった。

事実、婚姻前まではセイイータ公爵に阿っていた貴族や商人たち、そして軍の関係者ですらセイイータ公爵から離れ出した。

それでも、セイイータ公爵自身が持つカリスマ性は忌々しい事にグレンダートも認めていて、セイイータ公爵の元を離れない者たちもまた多く、そうして政治的バランスは危うさを持ちながらも保たれていた。

そして、グレンダートは出会う。

己にとっては《運命の女》だと、心から言葉強く断言出来る存在に。

……それは、確かにグレンダートにとって《運命の女》だった。

いつものように執務室で仕事をしているグレンダートの元へ、慌しく男が飛び込んで来た。

体躯も立派な男は、興奮した様子を隠そうともせず「おいっグレン！！」と声を掛ける。

「どっつした？騒々しい」

顔を上げたグレンダートは、幼い時から学友として長い付き合い合いのある男・レバンチエックを見た。

年は二つ程上になる乳兄弟でもある。

グレンダートが成人した年に、一般的な成人である十五で軍に入り、今ではグレンダートの筆頭騎士を務める親衛隊隊長でもある。元々、騒々しい男ではあるが、勤務時間帯にこうまで騒がしいのは珍しい。

事実、室内にいた王佐・ジェネユースが柳眉を歪めた。

「セイイータ公爵が急死した」

しかし、次に発せられた言葉に無言でレバンチエックの騒々しい来訪具合を咎めていたジェネユースは勿論の事、グレンダートもまた一瞬言葉を失くす程に驚き、けれどすぐさまそれは喜悦にと取って変わる。

「その話は」

「事実だ。裏も取れている」

ぬか喜びで終わらぬよう真偽を問うジェネユースの言葉に被せて、レバンチエックはグレンダートを真つ直ぐに見詰めて強く頷いた。

（邪魔者がいなくなった）

正直、グレンダートの頭を掠める感想がそれだった。

グレンダートにとって、邪魔で邪魔で仕方なかった存在。特にそれを強く感じる人間は二人いて。

その内の一人が死んだと、腹心が告げる。

「死因までは、はっきり調べがついていないが、外傷はひとつとしてなかったとの事だ」

政敵とはつきり言えるセイイータ公爵の屋敷には、レバンチエツクの息が掛かった間諜が長年潜り込んでいる。

今まで、これといった弱みにも脅しにもなるようなモノなど何一つとして見つからなかったが、こうした知らせは隠匿される事なく、真っ先に耳に入る。

グレンダートの頭の中を様々な思惑が駆け巡る。

自然死であろうがなかるうが、死を隠される事以上にあからさまに他殺、それも暗殺を示唆するように国内外に広まるのは不味い。

王族・貴族の突然死など特にそうだ。

真偽など関係なく、多少のスキャンダルを必ず伴う。

まして、セイイータ公爵と国王であるグレンダートは、ここ数年表立って対立していたようなものだったから尚の事。

噂話の話題を囁かれる程度に提供するのは構わないが、その《死》を使って混乱を招かれるのは頂けない。

未だ少なくはないセイイータ公爵の信望者たちに下手に動かれるのは不味く、水面下で虎視眈々と利権を狙う狸共につけ入る隙を与えても不味い。

目まぐるしく、けれどすぐさま対策を練ったグレンダートは、セイイータ公爵の死を公表するよう告げ、そして国王派に不利になら

ない噂話を付属させるようにも命じた。

セイイータ公爵の突然死は、心の臓の発作である事。

しかし、「もしかしたら、毒を盛られたのかもしれない」という事。

そして、毒を盛ったと影で噂されるだろう主役として、グレンダートが常日頃から目障りに思っている狸の中から数人名前を織り交ぜて数種類噂を流させる事。

セイイータ公爵を表立つてではなく、裏で妬んでいた狸を選別する事。

また、セイイータ公爵の死に因って得する者の名前も流す事。

暗殺ではない、という噂もはつきり流させる事。

など、幾つかの指示を出す。

それらは、スキヤンダルを好む者たちの瑣末な噂話程度として留^{とど}める事が最も重要だった。

あからさま過ぎる他殺の示唆は頂けないが、噂話を囁す嘴を閉ざさせる事は出来ない。

だからこそ、逆にそれを利用して、囁るばかりの人間の好奇心を満たし、かつ国王派に多大な疑念と不利を齎してならない。

セイイータ公爵の死因の真偽がどうあれ、表立った政敵ともいえる自分たちを追い詰めるような噂話は徹底的に統制・操作しなければならず、今回など特に慎重に噂話をこちらの手で手綱を取り切らなくてはいけないのだ。

「公爵側の人間で、すでに動いている人間はいるか？」

「いいや、今はまだいない。側近の何人かが屋敷に呼ばれている最中だ。だが、すぐに動くのは目に見えている」

「確かに」と、グレンダートは頷いた。

グレンダートがセイイータ公爵を疎ましく思っていたのは公然の秘密だった。

国外から付け入らせない為に、隙を埋めるが如く体外的には友好的ではあっても、セイイータ公爵の娘でありグレンダートの正妃であるはずのアリアの扱われ様を見れば、両者の仲など簡単に読めてしまえる。

外交に関して、セイイータ公爵と手は組んでも、それ以外でグレンダートがセイイータ公爵やアリアに関して譲歩してみせた事はない。

これで、グレンダートが国の頂点たる王として、力量不足なり、何やら人間的にも問題がある人物であったなら、セイイータ公爵も国王派から蔑ろにされるような事態にはならなかっただろう。

齢七歳という幼さで国王となつて数年ならいざ知らず、幼さを理由に支持される必要などない程に、国王としての資質をグレンダートは持ち得ていた。

しかし、それは歴代の国王の中でも突出したものではなく、また愚を伴うような能無しでもなかった。

それが結局、『王』としては平均的で平凡であるとグレンダートは気付いていない。

勿論、国内外の問題を安定させたまま平時を保つ能力は、英雄や賢王になれずとも素晴らしく有能である事には間違いはない。

また、グレンダートを補佐する周囲の人間の能力も高かった。

けれど、それだけだ。

国の安定を長期で保ち続ける才能は、英雄や賢王よりも賞賛されてしかるべき事であろう。

しかし、そこに別の第三者がグレンダートたちの知らないところで深く関与し、国の安定を強固にしていた事を知らずにいたのは、グレンダートの愚かさだと。

一体、誰が気付けただろう。

グレンダートは、国内外で高評価されている若き王だ。

その齡すら未知数を秘めていると思わせ、精力的に王として政務に取り組んでいる姿は周囲の人間を惹きつけるカリスマ性を見せている。

また、グレンダートの政治手腕は国民に見える形で幾つもの結果を出しているのだ。

故に、グレンダートに阿る者、周囲で働く者、王の下生活もとする民人。

様々な人々に、グレンダートにセイイータ公爵は知らないモノと思わせ、またグレンダート自身もセイイータ公爵という後見人などいらないと思わせてしまっていた。

それは、グレンダートだけを愚かとは言わせては憐れであつたろう。

しかし、それはグレンダートが拒絶し否定し続け、彼の言葉を聞き入れようとはしなかったが故の結果だ。

少しでも譲歩してみせれば、何か違っていたのだと。

グレンダートは、己を深く後悔する日を知らず。

「それで、正妃はどうするつもりだ？」

レバンチエックが問う声に、嘲笑めいた歪みを唇に浮かせ。

「あれとは当然、離縁する。所詮、お飾りの妃だとしても今後正妃として据えておく必要などもうありはしないだろう」

「それでは、彼女が次の正妃でよろしいですね？」

ジェネユースが確認する。

「愚問だ。まして、彼女は現在確認されている唯一の《眷属》だ。誰一人として文句は言わない」

「今まで正妃には、皆文句ばかりだったな」

何故、アリアが正妃であるのか？

などと。

疑問ではなく、陰口として公然にも囁かれていたのは周知の事実だ。

「それでは、セイイータ公爵側の人間が何を画策しようとする無駄になるよう速やかに正妃交代をしてみせましょう」

「ああ、誰にも抗議一つ言わせない」

ジエネユースに、清^{すが}しい笑みを零し、グレンダートは愛しい女の姿を脳裏に描^{えが}いた。

陽の光によつて、時折薄っすらとした金に見える赤茶色の髪と、緑を湛える薄い色彩の目。

可愛らしい顔立ちで常にグレンダートに微笑んでくれる娘。

愛しさが胸に込み上げ、グレンダートの浮かべる笑みは自然深まっていた。

3 愛妾・ミアリス

許されるものではない と。

怒り狂う感情はそう零した。

愛しい男の正式な妻となった女の、その姿を見た瞬間。
何故、こんな凡庸な女が陛下の妻だというのか。

権力を以って成された婚姻だと、誰もが口にしていても、だから
と言って許すつもりなどなかった。

自分の生家が出自が、様々な要因たる権力が正妃となった女の上
をいっていたならば、その座は問題なく自分のものになったのだと。
頑なに信じていた。

お飾りとはいえ、正妃は正妃。

その女に陛下の寵愛がなくなるとも、その座にいるというだけで正妃・
アリアを嫉妬に狂わずに見られようはずもない。

様々な公式の場で、必ず陛下の隣に添う女を何度心内じゅうないで八つ裂き
にして来た事か。

ミアリスは、手にした華奢な扇をぎりぎり握り締めた。
繊細な作りが容易に軋んで歪んだが、気にはしない。

己を着飾る為の所詮、替えの利く小道具のひとつ。

己を華やかに見せ、可憐に見せ、妖艶に見せ、魅力溢れる《女》
を仕立てあげてくれる小道具のひとつひとつに妥協した事はなく、

金に糸目などつけなかった。

幼き頃より、一目見た瞬間から恋焦がれて来た陛下の寵愛を他の誰よりも一滴でも多く得られるのならば、どのような種類タイプの女にもなってみせた。

時には無垢な少女となり、時には色艶溢れる美女となり。

閨の中では、大胆な娼婦にもなった。

陛下がその日その時、どんな「女」に食指を動かそうとしているのか機微を察して、幾らでも変化して演じて来た。

だから、尚の事思った。

権力で座を得た正妃など、いずれはそこから引き摺り下ろされ、当然己が座るはずなのだ。

ああ、ああ。

愛しいグレンダート陛下。

この身を焦がし、この心を翻弄する美しい人。

信じていたのに、ひたすら待ち侘びていたのに。

どうして、笑顔を向けられるべきが己でないのか。

どうして、愛しいと言葉を惜しみなく囁かれるのが己ではないのか。

どうして、隣に立つべき寵愛深き女が己ではないのか。

正妃さえ退けられたなら、全ては叶うと信じていた。

なのに、それなのにどうして

ミアリリスは、嘆きと哀しみを重なり合わせて深くて濃い憎悪と怨嗟に変える。

許さない、許せない。

狂った思考で恋焦がれる。

たった一人の男に。

嫉妬に塗れた心の醜さで、己が犯した罪など知らぬとばかりに仮面を被り、今日もまたしとやかな淑女であり続ける。

後宮の女に与えられる様々な特権は、結局のところ様々な制約に

縛られている。

身内に会うのさえ、決められた場所で決められた時間内のみで、侍女を伴うかどうかは自由であるが最低でも三人の女官が傍に控えている。

当然、後宮内はその華やかな宮の主人たる国王陛下以外の男性は立ち入り禁止である。

故に、国王以外の異性と会うのは、後宮から王宮に繋がる中間地点に設けられた宮であり、事前の届け出がない場合は火急でもない限り後宮から出る許可など容易にはおられない。

宮にある一室に足を運ぶと、週に二度、必ずこちらへの面会を申請しているセバンジョシが優雅な仕草で腰を折り、淀みない動作で上座のソファへとミアリリスを導く。

相変わらず、貴族として完璧な無駄のない所作の従兄にミアリリスは満足の息を吐いた。

「ご機嫌は如何かな？我が麗しの姫君」

「今のところ、よろしくてよ。お従兄様」

先日、新たに購入した南方小国伝統の飾り細工が施された扇を広げ、抑揚に答えた。

「おや。また新しい扇だね」

それを目に留めたセバンジョシが仕方ない子だね、とばかりに困った笑みをその優美な顔に浮かべる。

ミアリリスが、扇を力強く握り締める事でよくダメにしているの

を実の兄妹のようにして育ったセバンジヨシは知っている。

従兄が零す苦笑さに、ミアリリスは「一目で気に入ったからですわ」と敢えて言った。

壊した替わりではなく、気に入ったから新しい扇が増えたのだと言えども、長い付き合いの従兄が解らない訳ではないと知っていて、それでも見栄を張るように口にしてしまうのは、己の嫉妬深さが醜いものだとは無意識に思っているからだ。

ミアリリス「ノルバード」カロリングは、後宮に収められた三十ある《華》の一輪だ。

それも、貴族女性の成人年齢・十四を待たずに後宮入りした美貌の持ち主であり、曾祖母は四代前の国王の異母妹にあたる。

国王の子であろうと庶子の出は本来、一代限りの爵位で貴族ではなくなるが、才覚などに因っては新たな地位や爵位を与えられる事もある。

女兒に関しては、婚姻に拠るものが大きい。

事実、ミアリリスの曾祖母は当時のカロリング伯爵に見初められて伯爵夫人として生涯を過ごした。

もし、曾祖母が一代爵位で終わったなら、ミアリリスは今頃地位も肩書きもないただの庶民だったかもしれない。

そのような国王の庶子たちは多い。

一方、ミアリリスの目の前に優雅に座りお茶を飲むセバンジヨシは、現在一代限りの爵位持ちだ。

母親は、ミアリスの父である現・カロリング伯の実姉であり、父親は先代国王・ギルリアード二世だ。

国王・グレンダートとは腹違いの兄弟であり、六日違いでグレンダートより先に生まれた異母兄でもあるが、母親が正妃ではなく愛妾でしかなかった為に、当然王位継承権を持つてはいなかった。

それ故に、ギルリアード二世の逝去に伴い、母親と二人、カロリング伯爵家に引き取られ、そうして育てられた経緯から、ミアリスが物心つく頃には近くにいたセバンジヨシとは仲が良い。

「ところで、陛下の渡りはやはりないのかい？」

「……………」

お茶を飲んで一息を吐き終わると共に、唐突に話題を出され、ミアリスの手がピクリと跳ねる。

極力平静を装い六つ年上の従兄を見た。

そこには優しげな笑みにほんの少し哀れみを滲ませた顔がある。

カッと、胸の内側から熱が生まれたがそれを無理矢理押さえ込んだ。

「いやですわ、お従兄様。何を突然」

「僕は心配しているんだよ。愛妾のまま、お前という美しい華を枯らせてしまうのは惜しい」

柔らかな声音に潜む憐憫が、ミアリスの胸を突く。

まるで、枯れる事がすでに決まってしまうような空気を滲ませる。

優しさで包んだ哀れみは、時に酷く不快で最悪な凶器だ。

「渡りがないのは、今だけの話ですわ。陛下も物珍しさで構っているだけでしょ」

まるで、自分に言い聞かせているような言葉だとミアリスは気付かずにセバンジョシへ言い聞かす。

その声音が微かに震えていた。

三十ある《華》の中で、誰よりも陛下の寵愛を受けていたのはミアリスだ。

正妃・ Aria が廃された暁には、ミアリスが次の正妃候補の筆頭だというのは多くの宮廷人に知られていた。

それが覆されたのは、凡そ半年前。

ぼつと出の女が、グレンダートの寵愛を《華々》から一手に奪い取った。

正妃に見向きもしないグレンダートだが、後宮に《華》として入れられた愛妾たちの持つ背景を軽んじる事なく、ほぼ全ての《華》に適度に情を^{みす}与え、愛妾たちが齎す政治的バランスの舵を上手く取っていた。

それでも、他の《華》たちより頭ひとつ成長する《華》であったのは、それだけミアリスがグレンダートから寵愛を^{みす}与え^{そそが}られていたからだ。

グレンダートの《男》としての欲や矜持をミアリスは上手く満たし続けていた。

実家の持つ政治的権力は、必ずしも他の《華》たちより一番上だとは言えなかったが、王家の血筋に繋がりが、かつ国内随一の大商家の母を持つミアリスの財力は国内でも五指に入る。

グレンダートの寵愛を得る為、そして得続ける為に己を着飾る全てには王宮から支払われる決まった金額の王廷費では勿論足りず、母方の実家の援助を多いに受けていた。

当然、大商人の祖父もミアリスが正妃となる事を強く望んでいる。

正妃の子のみが王位継承権を持つことから、その王太子の外祖父という地位が齎す利潤を考慮せずとも当たり前前過ぎる美味しさに、幾らでもミアリスに出される金銭は惜しみなどされない。

そして、ミアリスは商人である祖父から人間関係の駆け引きや心理術・演技について様々な手解きを受けていた。

それはミアリスを後宮一の《華》として育てるのに十二分に役立つていたし、また祖父がミアリスに与えた知識や人脈コネは素晴らしいものがあった。

事実、後宮内から糸を引き、セイイータ公爵につく者たちを減らすように仕向け、正妃・アリアを孤立させるのに噂という名の情報を操った。

後宮内を掌握するのも時間は掛からなかった。

時には、手に入れた毒でライバルに成りえそうな《華》はそうそうに芽を摘み、厳しい審査と試験を通して国王陛下のみに忠誠を誓ったはずの女官や騎士たちの中にさえ己の息の掛かった者たちを多く配した。

この室内にいる三人の女官たちもすでにミアリリスの手足と化した者だ。

面会の場での会話は一言一句、全て後宮を取り仕切る女官長に報告され、そこから更に上に報告されるのが決まりだが、仮にここでセバンジョシと睦み合ったとしてもそれが外部に漏れる事はない。

尤も、ミアリリスの全ては国王・グレンダートのものである以上、グレンダート以外の男と性的に触れ合う事など絶対にありえない。

「物珍しさ、ね」

一つ溜めた息で零すセバンジョシに、ミアリリスの柳眉が歪む。

「何が仰りたいの？お従兄様」

常にミアリリスには優しい従兄は、だが時折ミアリリスには不可解な人と思わせる何かを持っている気がする。

しかし、自分に牙を見せて、あまつさえ剥くような人ではないとミアリリスは、セバンジョシに先を促した。

「物珍しさだけでは、《眷属》の相手は出来ないと思うよ」

「……………《眷属》だからこそ、相手をなさっているだけですわ。陛下は」

《眷属》が持つ重要性を解っていない訳ではないが、重要だからこそ、グレンダートが相手をしているのだと、ミアリリスは思う。

そう、思わなければ今にも叫び狂い、嫉妬の炎で全てを燃やし尽くしてしまいたくなる。

「しかし、《眷属》が現れてからだろう？ 後宮の《華》たちの誰一人として陛下の渡りがないのは」

柔らかな声音で、嫌な事実を綴られ、ギリツとミアリリスは強く奥歯を噛み締めた。

「《眷属》に対する陛下の寵愛は傍^{はた}から誰がどう見ても深い。今までの《華》への寵愛がいつそ見^は戯^はであったのではないかと思える程にね」

「……………」
「それに、噂では陛下は《眷属》に対して《セレの実》を飲ませていないそうだ」

「っ！！」

瞬間、ミアリリスはその言葉の内容を上手く理解出来なかった。

真っ白になった思考は、だが徐々に赤黒く染まりゆく。

ぎりりと、手の内の扇を握り締めれば軋み上がる。

グレンダートは、愛妾に子を産ませるのを厭う　それはよく知られた話だ。

父王であったギルリアード二世でさえ、三人いた愛妾の中で成し

た子はセバンジョシ一人。

先々代の国王や正妃、そして愛妾たちとの間で酷く醜い争い事があったというのが凡その理由で、だが一体何があったのかはミアリスの情報網にさえ引つ掛からなかった。

ただ、正妃が座を下ろされ愛妾の一人がその座に座ったという事。その愛妾上がりの正妃が、現在の太王太后陛下だ。

詳細を隠匿された醜聞をグレンダートが知っているかどうかは別として、グレンダートは閨の行為で必然的に生まれて来るだろう子供が存在を最初からないものとする為、愛妾たち全てに避妊薬であるすり潰して精製した《セレの実》を毎日服用するのを義務付けている。

数年前、それでも懐妊した《華》がいたが、その《華》は或る日忽然と後宮から抜き取られたように消え去った。

ミアリスが、排除する為に動こうとした矢先だ。

《セレの実》を服用しているのに懐妊したのは他の男と通じたからとして密かに処刑されたのだと、集めた情報で知った。

つまり、後宮の《華》である以上は決して懐妊はありえないし、懐妊してはならない。

《眷属》とて、今はまだ後宮に収められた《華》の一輪。

正妃以外の女には決して《妃》の尊称は与えられず、愛妾は正妃にならなければ何処までも愛妾であり、子を成す事は許されない。

だと、言うのに。

ミアリリスは、己の頭の芯が酷く痛みながらも燃え滾るとす黒い熱で占められたのを知る。

バキッと、手の内の扇が無残に折れた。

壊された繊細さは、いつそ哀れな程に美しくも見える。

「……………ねえ、お従兄様。その話、もっと詳しく教えて下さらないかしら」

ああ、ああ。

何て邪魔なの。

何て、煩わしい蟲なの。

ミアリリスは思う。

正妃・アリアも《眷属》の女も、排除し始末しなければいけない、汚らわしい蟲だと。

乞われたセバンジョシの柔らかな笑みに、いつそ純粹無垢めいた笑みを返してミアリリスは唇を吊り上げた。

3 愛妾・ミアリス（後書き）

国王の祖母は太王太后。
敬称は陛下。

自分なりに調べた結果ですが、もし太王太后陛下という尊称及び敬称が間違っていた場合、教えて頂ければ幸いです。

4 実兄・ルフォード

引き合わされた時。

母となる女性の腕の中に抱かれていた幼子の真っ直ぐな眼差しに何を見たのだろうか。

ただ、守ってあげたいと望み、けれどずっと一生を守るのは決して自分ではないのだとも同時に気付き。

それでも、父と名乗ったセイイータ公爵にそつと背中を押されて、おずおすと近付いた。

だが、どうしてもその幼子に触れる事は出来ず、この己の手をどのような行方へと導けばいいのか解らなくて知らず幼子を見詰めてしまっていた。

すると、こちらの躊躇いと戸惑いに気付いてか無意識か。

柔いやわ小さな掌が、そつと伸ばされる。

それを視界一杯に見て、（ああ……）と。

底知れぬ感情の漣に突き動かされてこちらからも掌を伸ばした。

触れた温もりと小さくて可愛らしい掌をやんわりと握り込んだ。

「……はじめまして、アリア。僕はルフォード。君の兄だよ」

血の繋がりは半分だけど。

それでも、そこにある温もりは手放し難がたい程、胸の奥をそつと照らして。

「これからどうか、末永くよろしくね」

アリア、アリア。

僕の可愛くて愛おしい唯一の妹。

けして真実は優しくなくとも、君は僕の大切なたった一人の妹。

だからどうか覚えていて。

哀しみの末に君がそれに溺れる事はないと、僕は強く言えるから。

君の幸せは、もっと別のところにあると。

いつそ、呪われるがいい。

僕の大切な妹を蔑ろにするばかりの国王も、その周囲の人間も。

「一体、どれだけの人間がお前の本性に気付いているのだろうか？」

不意に背後で吐かれた言葉に、ルフォードはうつすらと笑みを浮かべる。

先日、敬愛していた父・アルフォンソ「クラン」セイイータが急逝した。

慌しく激変する周囲をぼんやりと見詰めるばかりの気の弱い後継者であるルフォードは、父の遺体が納められた柩を目の前にして、ただ立ちつくす事しか出来ない。

そう、周囲の人間たちは思っている。

新たなセイイータ公爵を名乗る資格を持つ正当な後継者。

だが、生前父・アルフォンソが厳選してルフォードの側近としていた者たちの大半は、落ちぶれていくだけのセイイータ公爵家にさっさと見切りをつけて早速動いている事だろう。

アルフォンソに能力を見出されて日の目を見た者たちも多くいたが、感じた恩義を返すにはアルフォンソの急逝に伴う公爵家の目に見えている没落に好き好んで付き合い続ける者はあまりにも少なく、またルフォードの異母妹であり正妃・アリアに対する国王・グレン

ダートの様を思えば、正妃の実家に組する事で国王の不興を進んで買おうとは誰も思わないだろう。

離れ行くだろう周囲の人間たちをルフォードは父・アルフォンソが生きている頃から気付いていたし、それは父・アルフォンソも同じ事だっただろう。

本来なら、目を掛けた側近たちの裏切りや公爵家の没落の行く末に憔悴や絶望を感じ、どんな事をしてでもそれらを回避する為動かなくてならないのに、アルフォンソは或る日を境に表向きだけの対策しか取らなくなったのをルフォードは間近に見て知っていた。

一体、父に何があったのか？

そうは考えても、父が本気で対策をたてないならたてないで、きつとそれなりの理由があり、心配する必要などないのだと。

ルフォードは思い、そしてそれは間違いではなかったのだ。

「僕が簡単に気付かれてしまえるような人間に思えるんですか？あなたは」

柩に眠る父の姿を見下ろしたまま、ルフォードは返した。

振り返らなくても誰だが解っている。

声を掛けられる前から、感じ取った気配はここ数年で身近に馴染んでいるモノで。

それは何処か仄暗く、ひとりとした冷気を伴っていた。

愛想が良く、人当たりの良い好青年という周囲の評判をあつさり裏切る顔こそが本来のものであると、知らされた時には笑ったものだ。

病弱で気が弱く、父親が用意した側近という名の補佐役が何人もいないと時期公爵としてやっていけないと言われる才覚のない若者

そう思われている自分と、ルフォード声を掛けて来た男はお互い様なのだ。

「アルフォンソも、無念と言えば無念か。最後まで見届けられないまま死なねばならんのは」

「そうでもないですよ」

静かに近付いて来る男が、柩を見ているのが解る。

ルフォードよりも、アルフォンソの方が近付く男との付き合いは少しばかり長い。

「父は満足していました。確かにアリアが下ろすだろ茶番劇の幕を観られないは残念でしょうが、それは無念ではないでしょう?」

ぴたりと真横に立ち止まった気配を振り上げば、有り得ない美貌の主がいた。

己より頭一つ分は軽く高い背丈の男は、それにうつすらと笑う。

「確かに」

「父に後顧の憂いなど何一つありませんでしたよ。ただ、アリアが幸せになる事を望み、そしてそれは叶えられるのですから。…」

「ああ、でも唯一気にしていたのは、祖父殿が守って来たこの公爵家が衰退する事でしょうか。父は、祖父殿に多大な恩義を感じていましたから。まあ、理由を知られば尤もな事ですしね。僕も父とは似た立場ですし、父の気持ちも解らない訳ではないのですが」

「ウイリアスは気にしないさ。あれはあれで好き勝手に生きた人間だからな。ウイリアスは筆頭貴族としての矜持や貴族の義務など、簡単に捨ててしまえるような男だったぞ。ただ、家柄や権力が何を

するにも便利で利用するのに都合が良過ぎたから捨てなかつただけで、足枷になつた瞬間には未練なく切り捨てる」

「そういえば、貴方は祖父殿とも付き合ひがあつたんでしたね」

男の口からするりと出た祖父の名に、ふと思ひ出す。

「ルフォード。お前は、ウィリアスに良く似ている」

その言葉にルフォードは、頷いた。

父・アルフォンソに引き取られたのは九つの時だ。

それまでは、母と二人、この国の王都から随分と離れた隣国近くの小さな町で生活していた。

母・トリスは裁縫が得意で、それを生業にして生活の糧としていたし、ルフォードは幼いながら、手伝える事は自ら進んで手伝っていた。

片親は、別段珍しい事ではない。

自分が生まれる前は頻繁に近隣諸国では小競り合ひが起きていたというし、この国とて例外ではなく、その小競り合ひの影響で家族を亡くした者は少なくなかつたからだ。

しかし、大きな戦争には発展しないまま、ギルリアード二世が即位するのと前後して国は安定し始めていた。

何一つ変わらない毎日が続いていくのだと。

ルフォードは子供心に思っていた。

しかし、それは母・トリスが病死した事で変わってしまった。

始めはただの風邪だったが、それを拗らせた末の急逝だった。

頼るべき親類縁者に心当たりはなく、齡九つでは孤児院に行くしかなく、実際孤児院に預けられたが、それも半月足らずで父親を名乗るアルフォンソの登場で公爵家の跡取りとして引き取られる事になった。

義母となった女性は優しく、母・トリスを忘れる事はなかったが素直に慕う事が出来た。

引き合わされた異母妹はあまりにも愛しく感じられて、家族として馴染むのは早かった。

義母・チェリエナがその三年後、不治の病で急逝した時は心から悲しみを覚えた。

幼い妹と共に父に抱き締められ、棺に納まった義母を見送った。

それまで、よく笑いよく怒りよく泣いて喜怒哀楽を素直に表していた異母妹・アリアの面おもてから感情が消え失せた時は、ルフォード自身の感情も消え失せそうになった。

けれど、本当に感情が消えた訳ではないと、アリアの些細な仕草に見て取れてルフォードは詰めていた息を吐いたのをよく覚えてい

る。

あれから十七年。

それなりに色々あった。

だが、一貫してルフォードが望んで願っているのは、アリアの幸せ。

幸せならば、それで良かったのだ。

「僕も公爵家を簡単に捨ててしまえるんですよね」

父・アルフォンソが折角後継者に据えてくれたのにね　と、
男に零した。

「アルフォンソは、本来の立ち位置にお前を置いたに過ぎない。アリアとて似たようなものだ。親友だったギルの頼みもあっただろうし、ギルの苦悩に引き摺られて、アルフォンソ自身も一時期苦悩しまくっていたぞ」

「父も変なところで義理堅いというか、責任感があるというか」

ギルとは、先代国王・ギルリアード二世の愛称だ。

世間にも身近な人間たちにも、病弱なギルリアード二世をアルフォンソが裏で操っていたと言われているが、実際二人は無二の親友だった。

しかし、その事実を知る者は殆どいない。

実際知っていた人間は今では、ほんの数人を残して全員鬼籍に入っている。

親友だったと語ったとて、信じる者などいないだろう。

それ程に、アルフォンソの存在とその才覚に嫉妬した貴族や周囲の人間に依ってギルリアード二世とアルフォンソの関係は捻じ曲げられたまま、それが真実となってしまうっている。

親友だったと語れば、多くの人間に糾弾されるのは間違いない。
今は亡きギルリアード二世を愚弄しているとばかりに。

ルフォードは、明日にも埋葬される父・アルフォンソの顔を見詰めた。

妻であるチエリエナを亡くして以降、常のようにして気難しいげな顔をしていたから、実年齢より少々老け込んで見えたが、生来の実直さを失う事はなく、真偽を先入観や歪んだ偏見で見ない人間から見たら、恐らくアルフォンソほど生真面目さを見せる人間はいないと簡単に気付けただろう。

しかし、王侯貴族などという権謀術数の代名詞とも言える集団の中にあつては、曇りない目を持つ人間など希少であり、残念な事にそんな目を持つ者はいなかった。

まして、ギルリアード二世を操り人形にしていたと言われたアルフォンソの人物像は捻じ曲げられたまま本人は死去してしまった。

「祖父殿は、家を潰しても怒らないのだろうか」

疑問ではない確信めいた呟きをルフォードは零した。

肯定も否定も求めていた訳ではなかったが、生前の祖父・ウィリアスとは結局一目も会った事のないルフォードに、ウィリアスを良く知る男が小さな笑いを漏らして口を開いた。

「家を捨てられる男であり、同時に家を簡単に潰せるだろう男でもあったな、あいつは。目的の為に必要なもの unnecessary なものを簡単に線引きして、そうした事を決した後悔しない人間だ。家名や地位など、生きていくのに利用出来る有益さがなければウィリアスにとつて瑣末な存在ものだったさ」

「なら尚更、僕の好き勝手してもいいですね」

「アルフォンソとて本質は、ウイリアスにこよなく近い。恩義故にセイイータ公爵家というモノを壊さないようにしてはいたが、それも所詮はお前やアリアに幸せや利用価値を持たせる事が第一前提だ。アルフォンソの死と共に血統貴族筆頭としての地位は剥奪され、あのボンクラな国王に敵視されている以上没落は明らか。沈みゆく家ふねにしがみ付く価値も意味もない。アルフォンソとて解っていて、お前に言い残したのだろう」

脳裏に、父・アルフォンソの言葉が過ぎる。

思うがまま、好きにしなさい

父が望んだのは、アリアの幸せ。

そして、ルフォードが望むのもまたアリアの幸せ。

「……まあお前が望むなら、如何様にもこの家を守ってやるが」

こちらの答えを解っているからこそ、声音にはからかいを含んでいた。

ルフォードは、視線を男にと向けた。

「家はどうでもいいです。僕があなたに望むのは、先祖代々の墓が荒らされない事。祖父殿、そして父と義母の遺体は共に連れて行く事です」

何処に？

とは、訊ねない。

その代わりの様にして男が訊ねたのは、ルフォードの生母・トリスの事。

「母は、あの地で眠る事を望んでいましたから。まあ、その地が荒れるような事があれば、その時は祖父殿と同じ地に眠って貰いますけど」

母・トリスと共に過ごした地はトリスにとって思い出深い土地だったと言う。

死んだら、この地で眠りたいと時折口にしていた。

事実、トリスを公爵家縁の墓地に埋葬し直そうとしていたアルフォソは、ルフォードからその言葉を聞くと、トリスの墓はそのままだに、けれど身元のしつかりした専属の墓守をつけた。

そして、今この隣にいる男がルフォードの望みを叶える限り、母・トリスの墓を守る者は存在し続けるだろう。

「それでは、一足早くアルフォソは連れて行くのか」

男がそう言い、軽く片手を振っただけで柩の中から瞬時にアルフォソの姿は消えた。

そして、すぐさまアルフォソの姿が現れ出たが、それは精巧に出来た偽りでしかない。

「行きましようか。今宵、待ちに待った喜劇の幕引きです。あなたも、間近に観たいでしょう?」

男に向けられたルフォードの笑みは、凡庸な見た目に反して壮絶な色香を漂わせている。

今宵の悲喜劇に心躍らせた様に、男も釣られたように笑みを湛え、ルフォードの左手を持ちあげ、その薬指に恭しく口付けた。

「愛しき我が半身殿。お前の愛する妹の勇ましき姿を共にこの眼に納めよう」

観劇に誘い誘われるようにして、二人はその場を後にする。

残されたのは、本来の主を失った棺だけ。

灯された蝋燭の炎が幾つも揺れ、そうして静寂が訪れた。

4 実兄・ルフォード（後書き）

ルフォードの立場は、アリアからしてみれば母親が異なる『異母兄』ですが、色々調べたところ両親を同じくする『実兄』という以外に、父もしくは母が同じ場合でも『実兄』、または血が繋がっている実の兄としての意味で『実兄』ともありましたので、サブタイトルには『実兄』としました。

追記・10/23 数箇所修正。また『棺』と『柩』に関して修正しました。最後から二行目は、偽りの遺体が入っている状態なので『柩』から『棺』へ変更しました。

5 愛妾・サンドラ

この女性が、正妃……。

噂に聞いた通りそのままに、その面には、おとてこちらに對する感情や感想の一片すら滲ませない仮面のような《無》があった。

事前に聞き知っていたはずだが、実物と間近な距離で対面してしまつとあまりのその《無さ》に知らず息を飲んでしまつていた。

昨夜、国王陛下と初夜を過ごした己の体に残る気怠さを知られている気がして、感情の制御に物心付く前から徹底的に慣らされたはずの王族としての矜持が揺らぐのを覚えた。

羞恥 常に笑顔を絶やさず、また感情や表情・仕草を自己の望むまま最良な形で表にしてこそ完璧な王族としての生き方で義務と教えられていたのに。

一人の女性とただ対峙しただけで、激しく居た堪れないのは、本当に何故なのか。

答えに辿りつく前に、徹底して叩き込まれた反射として優雅に挨拶の為に腰を僅かに下ろし、すつと頭を下げ挨拶を口にしていた。

しかし、その間も脳裏にはどうして自分がこの女性に對して羞恥を覚えてしまったのか。

それを疑問としながら、気怠さを誰にも気取らせないよう完璧に気をしっかり持っていたはずなのに。

耳の奥に、ざわざわとしたモノがある。

間違えてはいけない と。

何を？

自問したが、答えに行き着けない。

奇妙な緊張が湧いた。

今や、この大陸中で最も水と緑を残している大国の正妃でありながら、その君主たる男に蔑ろにされていると国内外の一部には公然の秘密として知られている哀れな女。

侍女たちの口から、この国に訪れる前から噂話として何度も聞いてはいたが、なるほどと納得してしまうには至らない。

けれど、納得しないからといって自分にはどうしようもなく、また関係もなかった。

正妃になれるならそれに越した事はない。

けれど、それ以上に優先すべきはこの国から永続的な援助を反故されないよう努める事。

己は後宮に新たに生けられた《華》の一輪。

一日一日を過ごす内に、根付ていていくのだろう。

形式的で儀礼的な挨拶で、この場を辞す。

哀れなお妃様。

けれど、同情はしない。

望んでこの後宮に入った訳ではない己だが、正妃に同情出来るような立場ではなく。また、正妃はそれを望みもしないだろう。

ただ、閉じられゆく扉の音を耳にしながら、ふと思ったのはただ一つ。

特別な鳥籠や牢獄よりも、この堅牢な後宮おひからいつか自らの足で出て行けたらいいですね　　と、そんな事。

正妃自身の意思で、自らの足で、この狭小な世界から……………。

この国を裏から支えていたセイイータ公爵が亡くなったというのに、この後宮にあつてさえその死は大半の人間に喜びとして迎えられるた。

表向きは、その死を悼みはするが、これで正妃である女性は完全

な後ろ盾を失ったのだ。

後見人に指名されていたはずの血統貴族第二位のメリレンチエ公爵さえ、正妃の後見人を引き受けるつもりはないと国王に告げ、正妃へ追い打ち掛けるようにその息子たる次期メリレンチエ公爵が《眷属》の後見人に名乗りを挙げれば、その場でどちらもが国王からすぐさま認可された。

一刻と経たずに王宮内外に公表された速さからして随分と前から予定されていた事だったのだろう。

それが、セイイータ公爵の急逝で早まったのだ。

サンドラは、溜め息を零した。

一体、どれだけの人間がセイイータ公爵の死を真実悼んでいるのだろうか。

そう思うと共に、己の主おぼでもある国王・グレンダートの《眷属》への寵愛ぶりに国王派及び《眷属》擁護派の人々の多さを考えればあまりにも少ないだろうと容易に想像出来る。

(なんて事かしら……)

この国の影の立役者を失い、それは一体どれ程の損失となったのか。

気付く事も気付こうとする事もしないのだろうか。

それを憂い、サンドラは眼を伏せた。

尤も、セイイータ公爵の多大な功勞を知る者はあまりにも少なく、そしてセイイータ公爵自身表立って行動はしていなかったのだから、

仕方ないと言ってしまったえばそれまでなのだろうが。

「どうされました？姫様」

陶磁のカップを手にして宙に浮かせたままのサンドラに、そつと声^{こゑ}が掛かる。

思考の縁^{ふち}に掛かっていた意識が呼び戻され、サンドラは「何でもないわ」と首を振った。

国を出る時に唯一付いて来てくれた侍女のサリーが、その返答に納得いかない顔をしている。

五歳年上の侍女とは物心付く前からの付き合いだ。

元は、サンドラの母の遠縁の娘で、サンドラが生まれる前からサンドラの母が生む一番最初の子の侍女となる事が決まっていたサリーである。

その為の教育を徹底的に受けていて、サンドラ至上主義だ。

そして、サンドラが家族以外で心から信頼し、信用出来る唯一の存在であるサリーには己の性分を良く知られている。

「セイイータ公爵がお亡くなりになった事で、この先この国はどう変わっていくのか気になったのよ」

だから、結局心内を言葉にした。

サンドラのそれにサリーが尤もとばかりに大仰に頷く。

「姫様の仰る通り、将来^{あき}を憂^{うれ}わしてしまわれるのも致し方ないのかも
しれません。ですが、私たちが憂^{うれ}いたとて、この後宮に携^{たづ}わる人間
たちからしてすでに眷属様一色。私たちの意見に陛下は一瞬き程の
時間も耳を傾けはしないでしょう。それこそ、致し方ない事でござ

います」

「それはそれで、色々と問題があるのだけど」

陛下も困った方ね

そう零したがサンドラは、サリーが

口にした「致し方ない」という言葉に多大な憂いと諦めが含まれているのを理解していた。

自分もまた「致し方ない」と諦観している。

故国からこの後宮に送られてすでに四年。

大陸の国々にとって年々深刻化していくばかりの水不足問題故に、未だ安定した緑と水を持つこの国に継らなければいけないのもまた致し方ないのだ。

その資源を求めて、先の国王・ギルリアード二世が即位してから数年程までは近隣諸国と小競り合いが繰り返されていた。大規模な戦争に発展しなかったのは、幸いだっただろう。

本来、サンドラは故国の第一位王位継承者だった。

しかし、永続的な食料援助を求め、この国の属国となる証としてグレンダート王の後宮に入った。

故国は、この国の南方、他の一国を挟んだ砂漠の小国だ。

年々砂漠化の速度が早まっている。

大陸中で水や緑が不足している原因は、誰もが知っていた。

二百年程前に起こった大規模な水蛇狩りに起因する。

元々、希少種の水蛇は雨と水の神・サライライサの涙が生み出したと言われる幻獣種でもある。

国によって信仰する神々はそれぞれだが、元は複数の上位神の足許で創造されたとされるこの大陸は常に神々の息吹や存在を感じる事が出来た。

事実、水蛇狩りが起こる前は度々、下位神とはいえ神の降臨があったというし、神々の僕である精霊たちも頻繁に姿を見せたという。

そして、水蛇は新たに水が生まれる処に生息する。

安定した水が湧き続けるようになると、水蛇は新たな水の生まれる別の場所を探して移動を繰り返すとされる。

故に、水蛇は信仰の対象でもあった。

だが、それが乱獲されるに至ったのはある魔道使が偶然知った事に因る意外な効能に、王侯貴族や裕福な人々の欲望が肥大してしまつた為だった。

うつすらとした青をその銀の艶やかな鱗に纏う水蛇の、その尾と頭の血肉を食せば忽ち十は若返り、老化速度が緩やかになったという。

事実、水蛇の尾と頭の血肉を巡って醜く争つた末の勝者たちはその通りになった。

だが恩恵に与れなかった者たちの妬み嫉みによって、勝者たちは次々に殺されたのだから、不老長寿を手に入れたはずが本末転倒という最後は皮肉以外の何ものでもない。

水蛇が狩られた事で、新たに水が生まれていた土地からはみるみる水は干上がり、連鎖して雨が降らない日が続き、緑は枯れ始め、土地に作物も育ち難くなった。

安定していた水場も、忽ち減少し始め、そこに至つて水蛇狩りを

行った人々は大いに後悔したが、全ては遅過ぎた。

すでに水蛇はその姿を人々の前から消していた。
元々、滅多に見る事の叶わない希少種だ。

契約や友愛によつて人間に《力》を貸していた精霊たちも徐々に消えて行き、その姿を眼にし意思疎通する《力》を持つ精霊使としての素質ある人間は生まれなくなってしまった。

辛うじて、精霊たちの気配を感じられる人間が時折生まれる程度だ。

神の怒りを買ったのだ。

このままいけば、この大陸中が干乾びて滅び逝く。

だから、国々は生き残る為に模索し続けてもいるのだ。

その生き残る為の手段のひとつが、大陸二十三国の中で砂漠化の速度が一番緩やかであり、唯一その砂漠化から緑化に転じようとしているこの国から協力や同盟を得、必要ならば膝を付き頭こぶを垂れ慈悲や援助を乞う事。

だから、サンドラは王位継承権を自ら放棄し、この国に来た。

望んで後宮の《華》となりたかつた訳ではないが、故国の人間たちの中でこの国に対して恭順を示すに最も適した人間が自分であったというだけの話。

サンドラは、国王・グレンダートに対して愛情も親情も持っていない。

最初の頃は、それを持つと努力もしたし、持てるのではないかと自分の心が変化してくれる事を期待もしていた。

けれど、後宮というある意味国の中枢で最も陰を持ち、権謀術数渦巻く暗部と身近に接して、この国をこの国の上層部の人間を知れば知る程に諦観してしまったのだ。

なんて、浅はかな子供のようなのだろう

と。

この国の磐石となり、この国を支え、この国の行く末を幾重にも想定してそれらに対して様々な臨機応変さを考え続けて奔走し続けていた人物の本質を見ようともしなかつた多くの人々に。

怒りを通り越して呆れ、そして憐れまずにはいられなかつた。

それは先入観の殆どないサンドラだつたから気付けた事なのかもしれないと、思った事もあつたが、実際のところセイイータ公爵は確かに表立つて行動はしていなかつたが、後宮にいるはずの自分ですら調べてみれば簡単に知れた事だつた。

それなのに、それを知ろうとしない、知らない、それとも気付かないふりをしているのか。

どちらにせよ、真実を見る眼は誰も彼も多くが雲つているといふ事が最大の問題だつた。

そこに来て《眷属》の存在は、安心感をこの国の人間に与え、大いに気を抜かせてしまつていいるだろう。

砂漠化の危機や水不足の憂いに頭を悩ませる必要もなくなり、それどころか大陸全土を支配するのも容易だ。

それを齎す《眷属》の身を各国が虎視眈々と狙っているからこそ、

国王は一刻も早く眷属に愛妾ではなく、正妃という確固とした地位を与えたいのだろう。

まして、正妃の立場で《眷属》が国王の子を産めば、尚の事この国は強大となる。

《眷属》という国母を持ち、次代の王が《眷属》の血を引く事実が、大陸全土に与える影響はあまりにも大きい。

サンドラは、止めていた手を動かし、すでに冷めてしまっている紅茶を乾^ほした。

サリーが淹れ替えましょうか、と問うたがそれを断ったのはこの一杯さえ贅沢な物だと解っているからだ。

耳にざわめきが生まれる。

ざわめきを生むのは、風の精霊。

何をざわめいているのか知れないのが、サンドラには残念だ。

姿を見る事も声を聞く事も出来ない。

ただ、風の精霊が傍近くにいると知る程度の事。

(ああ、でもそうね……)

心当たりがないでもない。

大陸には元々、神の足許で創造・建国された国が大小合わせて二百数十あったという。

それが様々な変化や環境・争いに因って淘汰され、現在は二十三国に落ち着いているが、消えていった国は数多あっても、残っている国々は建国当初からの名を名乗っている。

各国、それぞれ幾度となく王朝は変わっても国名だけは変わらない。

そんな中で唯一、国が生まれた当初からただ一度として王朝が変わった事のない国。

それがサンドラの故国だった。

眩暈を覚えそうな程に永い歴史を持つ古国・エルドラーデル。

だからこそ、王朝の交代劇のない古き国にしか今となっては残っていない伝承がある。

王から第一位王位継承者に、そして国王となったその継承者から次の国王となる者へ。

そんな人間しか見聞き出来ない物。

第一位王位継承者だったサンドラは、すでに父王から伝承を聞いた後。

本来なら、そんな立場の者を国外に出すはずはなかったが、サンドラの父はサンドラが安易に口にしないとよく理解していた。

サンドラとて、簡単に語ってはいけなさと十分理解している。

「姫様。この国の将来さきを気にするより、今は姫様自身とエルドラーデルの今後を心配すべきでしょう」

真剣な顔つきのサリーを前にして、「そうね」と頷いた。

半年前から国王の寵愛は、《眷属》だろう娘一人に集中している。

新たな正妃となる娘の存在と、その娘だけが国王に愛されている様さまに後宮が閉じられるのでは、と。

愛妾と呼ばれる《華々》は憂い、日々戦々恐々としている。

確かにそうなる可能性は高い。

政治的思惑など、様々な利害関係が絡み複雑な人間関係を作り上げている後宮を安易に早々と閉じはしないだろうが、《眷属》の存在が周辺諸国に与える影響はあまりにも大き過ぎるのだ。

「いざとなれば、直接陛下に交渉するわ。幾ら何でもここで私たち《華》を後宮から抜き去ってしまうには、各国の《眷属》に対する暗躍が酷くなるばかりよ。私たちがここにいるのは、正式な契約と調印を経ているのですもの。穏便に後宮を閉じるには、時間が掛かるわ」

後宮閉鎖は水と緑を求める他国にしてみれば、その為に自国から厳選した女性をこの後宮に送った意味がなくなってしまう。いつそ、《眷属》そのものを手に入れようと、下手をすれば大規模な戦争すら起こりかねない。

流石に、一国の王ともなるグレンダートという男がその事を読めないはずはないと思うが、『恋は盲目』という言葉がある程だ。

古今東西、それが原因で国が荒れた歴史は大陸中数多にある。

(本当、難儀だわ……)

もしもの時を想定して直接交渉を思案するが、《眷属》を溺愛する今のグレンダートが耳を傾ける確率はあまりにも低い。

まさしく、先程サリーが口にしたように眷属一色の王宮の雰囲気は身動きし辛くて息苦しささえ覚えさせられる。

ふと嘆息した時、部屋の扉がノックされた。
来訪者に対応する為離れたサリーがすぐさま戻って来る。

「姫様、眷属様がいらっしやっています」

「……そう、お入れして頂戴」

そうして、扉の向こうから現れた一人の娘に対してサンドラは立ち上がり「ようこそ、いらっしやいました」と優雅な所作で頭を下げる。

「もう、サンドラさんたら、そんな他人行儀な真似はやめてっついても言っているのに。ねえ、頭を上げてよ」

拗ねた口調に従って頭を上げたサンドラは、両目を眇めた。
数人の侍女を背後に《眷属》だろう娘は言った。

「暇だったの。一緒にお茶していい？」

「ええ、喜んで」

サンドラが、どれ程この娘に思う事があっても安易に口にも態度にも出せない。

己の肩には、故国・エルドラーデルの全ての民の命と未来が掛かっているのだから。

だからこそ、完璧な笑顔を浮かべ、娘を歓待してみせる。

耳元でまた、風の精霊たちが何事かざわめいた気配がした。

5 愛妾・サンドラ（後書き）

魔道使まどうし 自身の中にある目に見えない《力》を引き出して、自在に操る者。

精霊使せいれいし 精霊と契約して主従関係を結んだり、精霊の好意で貸して貰える《力》を使う者。

どちらも、もともとそう多くはなかったが、水蛇狩り以降生まれ辛くなり、公式に存在を確認されたのは30年前が最後。

時折、精霊の気配を感じ取れる者が生まれるが、意思疎通は出来ない。

6 隊長・レバンチェック

綺麗なモノと考えていた。

もしくは、可愛らしいモノを想像していた。

国王と同様の、一国の《顔》となるのだ。

数多の民の頂点たる王の隣に立ち、次なる国王となる子の母として、この国の民たちの母として。

《国母》と呼ばれ慕われ敬われるに相応しい『モノ』を思い描いていた。

しかし、その期待は無慈悲に砕かれた。

あれは、何だ？

何故、笑顔ひとつ浮かべぬ仮面のような無表情の少女が。

何故、凡庸としか言えぬ顔の、その身に纏う空気さえ他人一人引

きつけぬ月並みなのか。

こんな《モノ》は認めない。

五年前に国王となった主君の前に現れた幼子の、他人より際立ったところひとつ見付けられぬその容姿に、落胆は怒りに変わった。

あんなモノが、大切な主君の正式な伴侶になるなど。

グレンダートの傍に控えながら、己の主君であるグレンダートの真向かいに立つ子供をいつそ切り捨ててしまいたい凶暴な衝動が湧く。

このような《モノ》が、自らの命と忠誠を捧げた国王・グレンダートの正妃になる事が決定している現実に唾棄してしまいたい。

外見に夢見過ぎていた事も、期待し過ぎていた事も、所詮は身勝手な願望のみでしかないと理性では解っている。

けれど、その子供モノの表情いろのなさは、感情を持たぬただの人形にしか見えず。

まして、その父親が誰かと考えれば瞬時に嫌悪が生まれ、しかしそれを面おもてに出すようなマネはしないまま、ただその《モノ》をいっそ憎んでいるかのような心中こころで凝視した。

ああ、こんな傀儡モノのような子供が、正妃となるのか。

こんな傀儡に、グレンダートへ忠誠を誓ったように、忠誠を誓い捧げるようにならなければならぬのか。

認めない。

こんな《傀儡の娘》を。

一体、誰が認めるといふのだ。
夫という名の伴侶であるはずの国王本人ですら認めない正妃など。

後宮と王宮を繋ぐ回廊は全部で二つ。

その中でも、国王が居を構える《白銀宮》と繋がる第三回廊を眺める事の出来る一角で、レバンチェツクは人を待っていた。

本来、王宮と後宮を繋ぐ回廊など容易に眺められるものではないが、生粋の王族たちの警護を主とした精鋭揃いの親衛隊しゅゑいたいに属している者たちは、後宮を除けばこの王城内で出入りが極端に制限されている場所はない。

王族の誰に付く事になるかで、各場所への出入り制限が決定され、国王や正妃の寝室へさえ、緊急事態には入室する事が許されている。

男子禁制の後宮も国王本人の許可さえあれば結局のところ出入り可能なのだ。

そして、後宮の中で唯一例外中の例外が、正妃とその正妃が生ん

だ子供たちの居住区となる《暁宮》だ。あかしぎのみや

精鋭揃いの親衛隊員に、女性騎士は僅かに三人。

その三人全てが現在、太王太后陛下付きとなっており、またいつの時代にも女性騎士がいるとは限らない事から、《暁宮》にのみ正妃とその子たちである王族付きの者達が警護の為に出入りを許される。

そんな理由から《暁宮》は後宮内にあって独立した居住区として扱われた為に、《暁の間》と呼ばれた正妃の居室はいつの頃からか《暁宮》と名を変えていた。

親衛隊の者たちが出入りするのを除けば、他の規則や禁止事項は後宮本来のものともまったく変わらない。

そして王族を守護する親衛隊の中でも、隊長という肩書きを持つレバンチェックは血統貴族第二位のメリレンチェ公爵を父に持つ生粋の貴族であり、一度戦^ひや内乱でも起これば一軍を率いる三大將軍の一人でもある。

出自に関係なく精鋭揃いで構成される王城の守護警備兵たる近衛師団の中で、卓越した実力者の貴族出身者で占められるのが王族警護をするのが親衛隊だった。

王族の傍仕えでもある以上、他国の要人たちとも接する機会は当然多い。

その為、親衛隊の騎士となった者達は幼い頃から礼法を身につけた貴族の出身者に限られている。

貴族であり礼法を身につけているのならば、剣の腕は実力主義である為、親衛隊となるのに例え下位の貴族であろうが没落寸前であろうが問題ではない。

むしろ、そのような貴族であればある程御家復興の為とばかりに剣の腕に磨きを掛け、優雅な礼法を徹底的に身につける。

そんな人間は、下手な貴族たちを親衛隊とするよりも、純粹な精鋭となるのからだ。

不意にレバンチェックは己の視界に入ったモノに声を掛けていた。

「ラゲ」

振り返った人物が、その柔らかな顔立ちを更に綻ばせた柔らかさでこちらに小走りに遣って来る。

「隊長。今日は非番ではなかったのですか？」

「そんなものは返上だ。今は王宮だけでなく後宮すら少々騒がしいからな」

「ああ、確かに騒がしいですよね」

緊張を伴う浮き足立った騒がしさは、どうにも隠しようがなく、王城全体に広がっている。

血統貴族筆頭という、現王朝が開かれてから数百年。

現王家と同じく国で一番古き歴史と血を連綿と続けていたセイイータ公爵家の、その当主の突然の死。

すでに逝去した昨日の内に、その訃報は国内外へ報された。

王宮内では、筆頭貴族の死を悼んではいるが、それは形ばかりの空気であって、本来形式に則った喪に服す儀礼などは一切執り行われない。

そんなところに、国王派のセイイータ公爵家に対する確執が窺え

る。

「それよりも、ここで会ったのは好都合だ。ラグ、現在のお前の任を解く。暫くは太王太后陛下付きとする。詳しい話は、レオンに訊け」

レバンチエックは当然のように言った。

だが、言われた当人の顔が一瞬その柔和さの中に鋭利を浮かべたが、頭に思い描く《理想の国王夫婦》という像に意識を取られていたレバンチエックは気付かないまま、目の前の青年を見遣る。

ラグアル・セツシャは、騎士の中の騎士として全騎士と全兵士たちの頂点に立つレバンチエックも認める剣の腕の持ち主だ。

子爵家の三男ではあるが、没落貴族でもある。

下手に貴族の称号を持つが故に、通常の民たちとは違う底辺にいた青年はだからこそか。

その剣の腕のみで騎士たちの憧れである少数精鋭の親衛隊員となつた。

そんなラグという愛称で呼ばれる青年に、レバンチエックは憐憫の眼差しを向けた。

親衛隊が守護する王族は現在、僅かに三人。

現国王のグレンダートとその祖母である太王太后陛下。

そして、正妃・アリア。

本来、最低でも五人の親衛隊員が正妃を常に守護すべきだが、専属としてラグのみが正妃付きとなっていた。

親衛隊員の中で、もっとも入隊時期が遅かったというのが正妃付

きに選ばれた理由である。

そのラグが専属に決まったのは四年前。五年前にアリアが正妃になると同時にその警護を命じられていた五人の隊員は国王の正妃に対する冷遇を見て、警護の任をすでに辞していた。

レバンチエックは常々、この柔和な顔立ちの、けれど剣の腕が六十人いる親衛隊員の中でも十の指に入る実力者であるラグが正妃専属である事を惜しんでいた。

しかし、正妃付きを志願する者はいない。

上からの命令とあれば、誰もが従うだろうが、結局正妃・アリアを真剣に命を掛けて守ろうと思う程には誰一人として忠誠など捧げはしないのだ。

今まで言いたかった命令を漸く下くだせた事にレバンチエックは安堵した。

(あんな女の下もとになど宝の持ち腐れだ)

ラグの実力を評価し、それと共に己の大切な親衛隊員がたった一人といえども正妃の傍にいる事が、そしてその正妃を守護する事が心の奥底から許せなかった。

国王・グレンダートの乳兄弟として育った時からレバンチエックにとって、己の命と忠誠はグレンダートのものであり、グレンダートの為ならばこの手を幾らでも汚す事を躊躇わない。

全てを捧げる主君の最も目障りな人間。

先代国王を傀儡のように裏で操っていたと言われるセイイータ公爵。

そして、その娘である正妃となった女。

どちらもが厭わしい。

「隊長。それは陛下の意思でもあるのですか？」
「そうだ」

何故、問うのか。

それがレバンチェックには純粹に解らない。

そんなこちらにラグが眉尻を下げた。

「アリア様の警護は今後、どうなるのですか？」
「何だ。お前が気に掛ける程でもないだろう。近日中に知らされる事だが、今の正妃は廢位が決まっている。次の正妃が誰か、聞かずともお前とて解っているだろう」
「……………」

それに言葉も首肯もなかったが、無言を同意とレバンチェックは受け取った。

実際のところ、現在正妃という地位にいる女を眞実《ほんりよ国王の妃》と認めている人間は殆どいないのだ。

今、この国にいる《眷屬》

グレンダートがこよなく溺愛している娘は、その容姿や性格をみても十分に国王の隣に堂々と立つのに相応しい娘なのだ。

水と緑を齎す《眷属》。

その娘が現れてから、如実にこの国の緑は増えている。

レバンチエックは、グレンダートに紹介された娘を思い出し、知らず笑みを浮かべていた。

グレンダートに寵愛されるに相応しい娘を、レバンチエックもまた慈しみたいと素直に思う。

「……それが、

」

《眷属》の娘をふと思い出していたレバンチエックの耳にラグの呟きが届く。

けれど、はつきりと聞き取れなかったレバンチエックは「ラグ？」と名前を呼んだが、相手はにっこりと笑顔を向けている。

レバンチエックは違和感を覚えた。

けれど、それが何に対しての違和感なのか当然のように解らない。

解らないからこそ何かを問い掛けようとした時、青年の目がこちらの肩越しに背後を見た。

だから、反射的にレバンチエックも背後を見る為に振り返った。

そこに待ち合わせていた父の姿を認める。

「それでは、オレはここで」

「ラグ……」

現れた父に意識を奪われた僅かの間。断りひとつで青年が踵を返す。

名前を呼んだが、明確な理由があつて呼んだ訳ではない。

立ち去っていく部下の背中に、胃の腑の底が嫌にひやりとする。

「レバン、待たせたか？」

「……いえ」

己をひやりとさせたのが何か。

意識を結局切り替えて、レバンチックは父親を見た。

父であり現メリレンチェ公爵・イヴァンレーンは歩みを止めず、レバンチックを促し連れ立って目的地へ進む。

第三回廊を横目に、国王の居室がある《白銀宮》の厳重な警備の中、迷いない決然とした足取りで歩いた。

徐々に、国王の居室が近づく。

王族の親衛隊隊長であるレバンチックは、当然国王・グレンダート付きである。

グレンダートの予定は全て把握していて、今時分居室にいるのを知っている。

「レバン。お前の考えは変わらないな？」

目的地に近付いている最中、不意のようにして父親が問うて来た。確認の疑問に（今更……）と、レバンチックは怪訝に眉ねを寄せる。

「現正妃の廃位は決定。それと同時に《眷属》を新たな正妃に。それに反対する理由など誰にもないでしょう？ 親父殿とて、頼まれていた後見人を辞退するのでしょうか」

自然と咎める口調になった。

父親が、そんなレバンチエックへ感情の窺えない視線を向けて来るのに、ここでもラグアルという青年に覚えたのと同じ胃の臓の底に冷たさを覚えた。

何かを掛け違えているのか？

無意識にそう己に内心で問うた。

「レバン。私は後見人にはならんよ。例え何があるうとな」

レバンチエックにとっては疎ましい限りのセイイータ公爵と、この隣を歩く父は懇意にしていたのを知っている。

だがそれも結局は、血統貴族の中でも筆頭と第二位という上位故の柵を持つ貴族の付き合いだとレバンチエックは思っていた。

事実、この父は今まさにセイイータ公爵の頼みを一度は聞き入れながら、その死と共に反故にしてしまうのだ。

レバンチエック自身が、身寄りのない《眷属》の後見人になると告げた時、父であるメリレンチエ公爵は反対ひとつせず、ただ一度頷いた。

だからこそ、セイイータ公爵の娘である正妃・アリアの後見人にならないよう言えば、「なるつもりはない」と即答された。

その間まのない返事に、セイイータ公爵との付き合いは本当に親しい者としての付き合いではないと改めて感じたのだ。

「親父殿とて、国王陛下に真実相応しいのは《眷属》であるミオしかいないと解っているはずだ。まして、グレンダートとミオは相思相愛。これ以上の理想的な正妃はいない」

それは、一種妄信めいた断言となり、そしてその力強い断言に隠れた危険性を解っていない。

物心つく頃からレバンチェックにとって、グレンダートという人間が全てなのだ。

故にレバンチェックは、己の中に《理想》を描き^{えが}。

その《理想》を《現実》とする術^{すべ}を模索し。

そうして、《完璧》を求めた。

レバンチェックの《理想》という《完璧》な現実世界に、今の正妃は相応しくない。

初めて見た正妃の幼き日の顔^{かほ}が不意に脳裏にと甦り、激しい拒絶と嫌悪が湧く。

「……………あんな《モノ》絶対に認めない」

目の前に全てを捧げた国王・グレンダートの居室の扉があった。

扉を軽く叩く父親の姿を横目に見て、レバンチェックは唇を歪めた。

今からメリレンチェ公爵は、現正妃の後見人にはならない事を告げ、その息子である自分は新たな正妃の後見人となる事を国王へと告げる。

メリレンチエ公爵家は血統貴族筆頭となるだろう。

没落していくセイイータ公爵に救いの手は何処からも差し伸べられない。

それに愉悦を覚えながら、レバンチエックは開いた扉の向こうを見遣る。

そこにいるのは、レバンチエックにとってたった一人の大切な主君。

(グレンダート……。お前の為なら俺は何だってしてやる)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1978q/>

貴方は私を支配する

2011年11月17日08時51分発行